保育の出前情報誌

すかんぽとやま

第19号

今号の内容

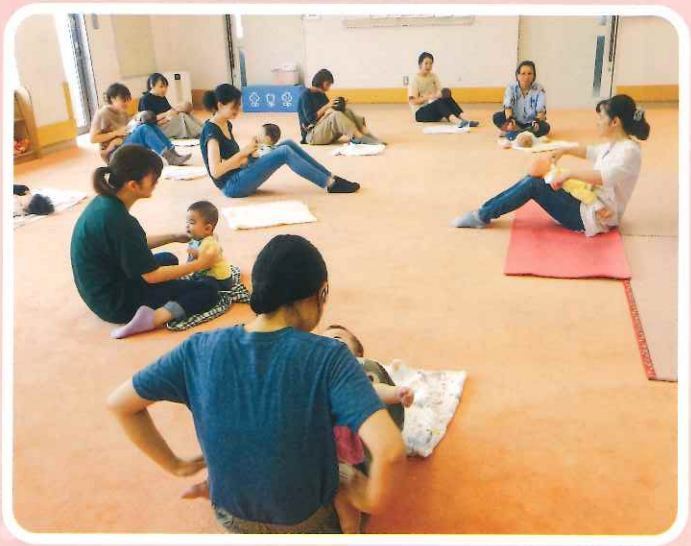
★「子どもの育ちを支える
子育て支援フォーラム」
―すべての人が子どもと
子育てに関わりを持つ
社会の実現をめざして―

- 「保育の出前」実演
  南砺市保育士会、朝日町子育てバスケット
- 実践報告
- 記念講演
  NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会
  理事長　奥山千鶴子

★「保育の出前に行きました！」
～地域で活動されているグループから～
富山市東部児童館、富山市中央児童館

高岡子育て支援センター
「はいはいよちよち baby 秋」

高岡子育て支援センター
「はいはいよちよち baby 秋」



福岡子育て支援センター
「赤ちゃんとマッサージ＆ヨガ」

この情報誌は、共同募金の助成を受けています。

令和元年度「子どもの育ちを支える子育て支援フォーラム」

―すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現をめざして―

令和2年1月18日に、「子どもの育ちを支える子育て支援フォーラム」が開催されました。日本の急激な少子高齢化と人口減少により、家族構成や地域の姿が大きく変化し、地域社会とのつながりが弱くなることで、保護者の子育てへの不安や悩み、家族や地域からの孤立が、児童虐待をはじめ、子どもの命を脅かす深刻な課題につながっているともされています。このような状況の中、未来を担う子ども一人ひとりの育ちを保障し、子育て家庭とともに、地域社会全体で支えていくような「子育て文化」を育むことが重要となっています。

こうしたことから、富山県保育連絡協議会では、平成9年度から関係機関・団体と協働のうえ実施している子育て支援「保育の出前」活動実践を通し、子育ての楽しさや喜びを地域社会へ広めるなど、子育てしやすい地域づくりを進めています。今回のフォーラムは、それぞれの地域における特色を活かした連携協働のなかで進める子育て支援の大切さを実感し、今後の関係機関等相互の「つながり」を一層深めることにより、地域での子育て・子育ちを支援する仕組みを考えることを目的に開催され、「保育の出前」実演と、シンポジウムが行われました。

「保育の出前」実演

南砺市保育士会
テーマ『のぞいてみよう こどもの気持ち ～こんなとき どうする？～』

毎日の子育ての中で、「どうしてこんなことするの？」と困ったり悩んだりすることはありませんか？例えば、公園で遊んだ後、買い物へ行きたいのに遊びを終わらせたくなくて動こうとしないとき、子どもの「まだいっぱい遊びたい気持ち」に共感することで、子どもはお母さんに理解してもらえたと満足します。数を数えて買い物に行くことを提案すると、子ども自身が遊びの区切りを納得し、暴れずに買い物に行くことができました。子育てで戸惑いや怒りたくなったときは、大きく深呼吸をしてから、子どもの気持ちに寄り添い、ちょっとした工夫や言葉がけをしてみませんか？

朝日町子育てバスケット
テーマ『困った時こそみんなで子育て！ ～一人で悩まず身近な人を頼ってみませんか～』

子どもといる生活は楽しくもありますが、時には悩んだり困ったりすることがありますよね。毎日の子育てを一人で頑張ろうとしていませんか？あなたのそばにはきっと子育てを応援してくれる見方「子育ておたすけレンジャー」がいます！レンジャーは子育てで困った時に話を聞いたり、アドバイスをしてくれる子育て支援センターや保育所の保育士、近所のママ友達、おじいちゃんおばあちゃんです。レンジャーのちょっとした一言と、みんなで楽しく子育てすることが、お母さんと子どもを笑顔にしてくれます。

「保育の出前」実演を見ての感想

～アンケートより～

- 保育の出前は、子育ての悩みを持つ母親にとって気持ちが楽になるのではないかと思いました。
- 子どもの気持ちを考えたり聞いたりして、子どもに向き合うことが大切だとわかりました。

実践報告

富山市東部校下における子育て支援について

富山市東部校下民生委員児童委員協議会
主任児童委員　増百　葉子　氏

●はじめに

東部校下では、医療機関が充実し様々な教育機関や公共施設もあり、子育てしやすい環境が整っています。そして富山市長から委嘱を受けたボランティアである保健推進員が中心となって子育て支援の活動を行っています。

1.『東部ママ広場』の成り立ち

以前、保健推進委員が開催していた『仲間づくりの赤ちゃん教室』に参加し卒業されたお母さん方が、保健推進委員の協力のもと自主サークルとして子育てサロン『東部ママ広場』を開催していました。が、ここ数年は参加者減少により活動を休んでいました。

平成21年、核家族化の進行や、インターネット等の急激な普及により多くの情報が飛び交う中、「子育てがつらい」「相談できる人が身近にいない」「子どもとどう向き合えばいいかわからない」という育児不安やストレスを抱える母親の増加により、「身近な公民館で親子の交流を通じ、母子の孤立や子育て不安等、少しでも和らげる場となれば」という思いから、保健推進委員7名で『ママ広場』を再開することになりました。

2.取り組みで大切にしていること

『ママ広場』はママの居場所作り・ママ支援を主眼としています。子どもを支援する際は、まず子どもの一番身近にいる「ママ」に関わる、そして“子どもは親の所有物ではない”ということを自覚しながら親子で成長していけるよう援助しています。

東部校下地区では、前任の主任児童委員の方から引き継ぎ15年間、保育園・小中学校へ学校訪問を行い、近年は高校へも訪問しています。大切なのは、親子に起こる課題の芽を早く摘むということです。保健推進委員の頃から関わっている親子との関係を通し**乳幼児期からの切れ目のない支援の重要性**を感じているところです。

3.具体的な家庭への支援

ケース1

夫の育児協力がなく、金銭感覚の希薄な母親の場合

主任児童委員である私が自宅の訪問時の様子を学校へ伝え、学校側と情報共有を行い、スクールソーシャルワーカーも交えて相談をしています。その他、保健師や訪問看護師との情報共有も行っています。訪問の際には、お母さんの話を「傾聴」し、「そうだね～」「大変だったね～」「頑張ったね～、偉いわ～」と「寄り添う」感じで聞きながら子どもたちのことを一緒に考えています。

ケース2

母子家庭。金銭感覚が希薄、母親が病弱で孤立している親子の場合

経済的困窮から小学校・保健師・市役所と相談し、生活保護を受けている母子家庭です。お母さんは、子供の頃のつらい思い出から学校と距離を取ってしまうため、偶然、私が妹さんと知り合いだったため、妹さんから情報提供を受け、私が学校へ伝えました。数回の引っ越し後も学校側が毎回、情報を得られないということで、卒業まで支援をしました。

ケース3

病弱な母親と子への支援

このお母さんとは、私が保健推進委員として赤ちゃん訪問で知り合ってから10年がたち、気軽に会話ができる関係です。現在は月1･2回の訪問やメール連絡、保健師、スクールソーシャルワーカー、訪問看護師など誰かが訪問しています。ある日、お母さんが不在で勝手にカギを開けて外へ出た子供を近所の補導委員の方が見かけて私に連絡くださり、お母さんが帰宅するまで一緒に過ごしたこともありました。

●おわりに

今後の課題としては、働きながら、あるいは介護や孫の子守をしながら主任児童委員や保健推進員として活動できないか、支援の場に足を運ばなくても一人で悩むお母さんへ何とか支援ができないか悩んでいます。また、民生委員・児童委員としての守秘義務により、誰にでも状況を話せないため,支援への限界や無理も感じています。このように様々な課題がありますが、今後も「笑顔で!元気に!明るく!」をモットーに、地域での支え合いを大切にしながら微力ではありますが活動していきたいと思っています。

記念講演「虐待から子どもを守るために地域ができること」

奥山　千鶴子　氏（NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長・認定 NPO 法人びーのびーの理事長）

1.「びーのびーの」の活動紹介

親子の交流広場として2000年に、商店街の空き店舗を活用して「NPO法人びーのびーの」を立ち上げました。今は保育所に支援センターがあると思いますが、当時横浜には児童館などの居場所がなくて、親たちはみんな公園で子育てをしていました。でも、赤ちゃんなどはなかなか公園では遊びきれないということもあって、居場所がとても欲しかったのです。

当時赤ちゃんを連れてきていたお母さんたちが、今ここのスタッフをしています。もう20年たっていますので、子どもたちは今、高校生、大学生になっているわけです。地域でその活動を継続してきて、そこの利用者が今度は担い手になる、そういうことが現実的に起こっていることに、私自身も本当にこの活動をやってきて良かったなという思いです。

横浜の菊名がルーツですが、もう少し大きな子育て支援拠点を横浜市から受託しています。菊名の隣の駅、大倉山に「どろっぷ」、その隣の綱島に「どろっぷサテライト」があり、毎日60～70組が来る大きな施設です。横浜市としては、小さな広場もいいのですが、人口規模的に小さな広場をたくさんつくってもカバーしきれないということで、こういった大きな拠点を各区に1館つくることになりました。また人口が多い区にはサテライトということで、もう1館の整備が進んできました。

皆さんのところの保育所の支援センターと同じ事業ですが、私たちの区には保育所の支援センターがたった一つしかないので、どちらかというと単館型でやるような形の支援センターが多いのが特徴です。同じ拠点事業ですが、都道府県、市町村で取り組みの方法が異なるのも一つの事業の特徴だと思います。

2.子育てひろば全国連絡協議会の設立

菊名の事業が国のつどいの広場事業につながりました。この事業をうまく育てていくためにはネットワークと研修が必要だと思いました。そこで国に、必ず研修をやってほしいとお願いして、子育てひろば全国連絡協議会を立ち上げたのです。

このつどいの広場事業が全国に普及して、最終的には保育所の支援センター事業と同じ事業ということで、地域子育て支援拠点事業として全国に7400カ所ぐらいに増えてきています。そして、私たちはそれを通称「子育てひろば」と呼んでいます。

子育てひろばというのは、行政からお金をもらっているかどうかに限らず、妊娠、出産、乳幼児期の子育て家庭が気兼ねなく集まって交流できる場です。気兼ねなくというところが非常に重要です。それから、乳幼児期の子どもたちが安心してのびのびと遊べる場です。そして、子育ての情報を得て交換できる場、親子が育ち合う仲間と出会える場、子育て経験や体験を通して親同士が学び合える場です。親自身が主体となれる場であることが重要です。そして、人との関係性を育める場です。子育ての悩みに寄り添って聞いてくれるスタッフがいる場、地域のボランティアをはじめさまざまな人が子育てに関わり、社会全体で子育てを応援する場、このような機能を持つところを「子育てひろば」と呼ぼうと定義付けをしました。

3.子どもや子育て家庭の現状

子どもや子育て家庭の状況が良い方向に向かっているとは決していえないと思います。例えば少子・高齢化の現状です。さらに家族の状況が大きく変わりました。平成の30年間に家族がどう変わったかというと、平成の初めに夫婦と未婚の子どもの組み合わせが37%と結構多かったのですが、今は3割を切っています。増えているのは高齢の単身世帯、それから夫婦のみの家族、特に高齢の夫婦だけという世帯が多いと思います。

ひとり親家庭は平成の初めに比べて2倍ぐらいになっていて、約7%がひとり親家庭という状況です。そして3世代同居は、北陸の方はまだ多いと思いますが、全国的にはこの30年で13.1%から5.9%と大幅に減りました。増えているのはひとり親家庭や単身世帯で、家族の状況は大きく変わってきています。

それと、日本の少子化の大きな原因の一つに、未婚化や、結婚しても子どもを生むのが35歳を超えているという晩婚化がありますが、もう一つの要因として男女の性別役割分業観があります。日本の場合、どうしても女性の方が家事・育児の負担が大きく、さらに今は女性活躍ということで仕事もしっかりしていますから、女性の負担感が非常に大きいのです。

夫の休日の家事・育児時間と第2子以降の出生割合を見ると、男性がしっかりと家事・育児をする家庭には2人目が生まれています。1人は何とかなりますが、保育園に入れるときも、送り迎えのことも含めてある程度関わってもらわないと本当に厳しいと思います。

日々お母さんたちと話をしていますと、子どものこともさることながら、パートナーに対してのお話がとても多くて、その話を聞きながら、そこのパートナーシップがうまくいったら決して厳しい状態にはならないのではないかとすごく感じます。そのサポートさえあれば、子どもにちゃんと向き合える余裕が生まれるのではないかと思います。

保育園と幼稚園の年齢別利用者数は大きく変わっています。富山県では、認定こども園が増えているそうで、首都圏はまだ認定こども園が多くはないのですが、この5年、10年で大きく状況が変わりました。そして昨年から無償化も始まり、さらに大きく変わるのではないかと思います。そういった社会のスピード、制度の変遷などに私たちは敏感に対応していか

なければいけないと思います。

無償化になっても、3・4・5歳でも、まだ幼稚園・保育園・認定こども園につながっていないご家庭があるとすれば、そこをどうしていくかが課題ではないかと思います。

4. 地域子育て支援拠点の取り組み

地域子育て支援拠点で把握される家庭状況として、厳しい家庭はしっかりと相談につながらないと見えない部分もあるのですが、支援センター、子育てひろばに来るには理由があると私たちは思います。「子育てがつらいんじゃない。子どもはかわいいけど、不安や孤独で押しつぶされそうでどうしようもない時がある。」「産休前は教師としてバリバリ働いていたのに、社会からの疎外感。息子はアトピー。それでも周囲に弱さを見せられずにいた。」、専門職の方でも学校の先生でも、結構そんなことをおっしゃいます。「早く中学校に復帰したい。」とおっしゃる方、正直な方だと思います。本当に弱さを見せられない。「プロと思われているから、そんなことで音を上げられない。」という思いを語ってくれる人もいました。

お父さんで正直な方もいました。「子どもがまだしゃべらない。どう関わっていいのか分からない。キャッチボールでもできたら関われるけど、まだ赤ちゃんだから僕はどうしていいのか分からない。」、他には「知り合いもおらず、地理も分からない土地での子育てのスタートはとてもつらかった。家の中で赤ちゃんを抱え、ひどく追い詰められていたと思う」。転勤に次ぐ転勤です。こういう方は本当に仕事ができません。夫の転勤に付いて回っているのです。だから、子育て支援センターや地域子育て支援拠点事業は非常に重要だと思います。どんな地域でも、支援センターに来る方々というのは、転勤族の方が多いのです。地域になじんでいくためにも、この支援拠点を利用するのは非常に重要なことだと思います。

「拠点づくりでつながりが深まった」と言ってくれる利用者が多い支援拠点、支援センターはどういうところなのか。調査したところ、二つの要素がありました。一つは、土曜日と日曜日に支援拠点を開催していること、もう一つは、支援拠点でお昼を食べられることです。それと今、就労家庭が増えているので、土日に開いている支援センターがあれば利用したいというニーズが非常に高いです。土日にやると、パパたちが多く参加してくれます。そういうことで、土曜日か日曜日に開けているところの利用者数が増えていますので、支援拠点自身も変わっていかなければいけないと思います。

地域子育て支援拠点で生まれる「つながり」とは、親子が自己肯定感を育み、みんなに「頑張っているね。」と言ってもらえる場所なのです。

5. 支援者の役割

私たち支援者の役割として、とにかく温かく迎え入れる、身近な相談相手となる、利用者同士をつなぐ、利用者と地域をつなぐ、支援者がアウトリーチで地域にも出ていくということを、研修で確認しながら行っています。私たちが1対1でお母さんたちに何か答えを出すということではなく、相談相手であり、いつも隣にいて、何かあれば話が聞ける存在であり、何かあればいろいろな関係機関につなぐ立場であります。お母さんたちが安心して過ごせる場を、いつも環境を整えて待っています。

シニア世代のボランティアの方がたくさんサポートに入ってきています。これは、同質性の緩和になります。同質性の緩和とは、同じ母と子どもだけではなく、いろいろな世代の方、老若男女がいることが同質性を和らげるということです。お母さんと子どもだけだと、比べたくなくても子どもの成長、発達も含めて比べてしまうのです。子どもたちはおじいちゃん、おばあちゃんが大好きです。そのことは子どもにとっては、親以外にも遊んでくれる人が世の中にいるという社会に対する信頼感です。これを私たちは「祝福のシャワー」と言っていますが、赤ちゃんに家族以外の祝福のシャワーをどれだけ地域で提供できるか。シニアの方々は「赤ちゃんを抱っこさせて。」と言って、そこから元気をもらっています。また、お母さんも、赤ちゃんをいろいろな方に抱っこしてもらえて、「赤ちゃんを産んで良かった。いろいろな人に祝福してもらえる。応援してもらえる。」という実感を子育てひろばの中で体験していただきたいと願っています。

若い力も大事です。最初は子どもも様子を見ているのですが、このお兄ちゃんが遊んでくれると思ったら、容赦なく引っ張りまわして、夏には水をかけられまくっています。学生たちが小さい子どもたちと関わることで、「自分も子どもと遊べるんだ。」「子どもが笑ってくれた。」とか、子どもと遊べる自分の発見ができます。ですから、こういう世代の人たちがたくさん来てくださるというのは大事だと思います。

今、いろいろな事業をしていますが、中学生が赤ちゃんとふれあう体験授業を支援拠点、支援センター等で行っています。

子育てひろば全国協議会で、一番力を入れているのがプレママ・プレパパ応援プロジェクトで、いわゆる妊娠期の家庭です。ここから切れ目ない支援をしていくということです。ホームページから全国の地域子育て支援拠点を探すことができます。

6. 横浜市子ども・子育て支援事業計画策定に向けて

新たな子ども・子育て支援事業の5か年計画が4月にスタートするに当たって、ニーズ調査、アンケート調査をされたと思います。横浜市でも行いました。5年前の調査と昨年の調査を比較してみました。5年前にやっていない項目があるので単純に比較はできませんが、最新の一番の課題は、「子どものしかり方、しつけ」です。

そして皆さんご存じのとおり、4月から体罰禁止です。これは家庭にとっても子どもに対しての体罰の禁止が法律上定められてきます。そうなると保護者の方々はまた困ってしまいます。自分の子育てについて、これでいいのかという不安が

あります。自分の子育てに自信がない家庭ほど表に出にくくなります。むしろ子どもの声が聞こえないように窓を閉めてというようなことになりかねないと思います。ですから、どのような支援を行うべきなのか、私たち協議会としても協議していますし、どう保護者に伝えていくのかということが非常に重要になってきます。

今、国からガイドラインも出されていて、テレビなどでも話題になっていますが、特に支援に関わる私たちは、しっかりと考えていかなければならないと思います。今、個々のお母さんの困り事と、それから私たちの支援の在り方について、非常に重要な局面にあると思います。

アンケートでは、「子育ての困りごとを相談しやすい相談先」の1位が、「地域子育て支援拠点など地域の身近な場所での相談」でした。本当に厳しい状況にある家庭は相談につながらないのだと思います。そういう意味で、どれだけ敷居を低くするか、そこが問われていると思います。もちろんこういった場所に出てこられない人たちへのアウトリーチ、訪問などの連携も非常に重要です。ですから、産前からの切れ目ない支援、赤ちゃんが生まれた家庭への訪問、そしてこういった居場所へどうつなぐか。本当に切れ目のない支援を考えなければなりません。

そのためには、皆さん一人ひとりがそれぞれのお仕事をされていると思いますが、そのウイングを少し延ばすということです。迎え入れるとき、保育所の皆さんであれば、支援センターや在宅子育てからのつなぎという部分ですし、母子保健からのつなぎということでもあると思います。小学校への送り出しもあると思いますが、その受け入れと送り出しをもう少し丁寧にやっていくことが求められているのではないかと思います。

これは予防型支援体制の構築の中でも言われています。いわゆる児童虐待防止対策の強化に向けた緊急総合対策の中に、地域子育て支援拠点、利用者支援事業という相談窓口の設置促進と周知の推進が位置付けられています。一つは子育て世代包括支援センターで、2020年度の3月までに全ての市町村にこの子育て世代包括支援センターを設置しなければなりません。これは産前からの切れ目ない支援をしっかりやるようにという国の方針です。

もう一つは、在宅支援サービスの充実です。これは私たちも行っていますが、具体的に相談するだけでなく、きちんとつなぐということです。様々な関係機関、ファミサポや一時預かりなどの具体的な事業につなぐという利用者支援事業です。

7. 子どもが大人になるプロセスに社会が関わる

皆さんにお伝えしたいことは、家族でしっかりと愛着を持って子育てするのは当然ですが、その家族だけに全て担わせるのは非常に難しい時代だということです。家族がしっかりと子どもを育てていくために、上手に支援活動、サービスを利用することだと思います。私は、里帰りしなくても、地域で1週間、2週間産後ケアができるような仕組みができたらいいと考えています。というのは、2人目が生まれたときに里帰りは難しいです。もし里帰りしても、実家も老々介護で全然面倒を見られないということもあります。こうしたことを考えると、家族に全てを担わせるのではなく、地域にどれだけサポート体制がつくれるかということが重要で、そこには地域の人たちの力がとても大切です。

私たちは20年前に当事者団体としてスタートしましたが、現在は、小学生・中学生がボランティアに来て、高校生も家庭科の授業で来て、大学生も受け入れていて、社会人でまだ結婚していない人たちの家族シミュレーション、疑似体験をするという事業もしています。全ての世代の人たちに子どもに関わってもらいたい、そのことが家族というイメージを持つことになり、子どもはかわいい、子どもは面白いという出会いになると信じています。

いずれ子どもだけ、お年寄りだけというのではなくて、地域にこういった場所がたくさんできてくる、富山型というのもありますので、本当にそういう時代にきっとなるのだろうと思いながら私たちも活動をしています。

8. 地域がふるさとになる

自分自身の子育ての経験から、地域の中で子育てが支えられている実感が欲しいです。地域でベビーカーを押していたら声を掛けてもらえる、気にかけてもらえるということが、子どもにとってその地域がふるさとになるということではないかと思います。育っていく環境が豊かであってほしいし、いろいろな大人に関わって育つことが重要だと思います。

子どもがどれだけ厳しい状況でも、地域の知っているおじちゃん、おばちゃんの存在が、その子にとって大きな影響力になると思います。多感な時期に頼れる人が地域にいるということは非常に重要だと、改めてこの20年の活動の中で振り返って感じています。

9. 子どもが育つ、安心して子育てできる地域づくりのために

安心して子育てするには、転入者や子育て家庭を温かく迎え入れる入り口を地域につくること、そして、それを連携してリレーをつないでいくということです。また、親同士の支え合いを育むということです。私たちが1対1でというより、親たちで解決していくような力を育む環境を整えることだと思います。また、地域とのつながりをしっかりつくること、そして、困難な家庭への寄り添いです。これは訪問や子どもの預かりや生活支援、里親、どこまでやったらいいのだろうと私たちも思いますが、でも一歩一歩と思って、少しずつ活動を広げています。

本日、子育て支援の種を飛ばそうということで、皆さんとともに、子どもたちの未来のためにそれぞれの地域ができることを、日々の私たちの活動の中から見つけて考える機会を頂戴しました。また、明日からそれぞれの現場でご活躍をいただければと思います。

「保育の出前に行きました！」

◎富山市東部児童館　親子サークル

令和元年6月、常盤台保育園子育て支援センター「ぶーふーうー」が富山市東部児童館で保育の出前を行いました。ぶーふーうーで行われているニコニコタイムで人気のある季節の歌や手遊び、ふれあい遊びの中から出前メニューを選んでいただきました。

この日は、35組の親子が集い、熱気にあふれる保育の出前になりました。初めに手遊びとふれあい遊びをしながら、お母さんからの愛情をたっぷり受け取った子ども達。続くパネルシアターでは、太鼓や動物を手や声で表現しました。先生たちのリズミカルな動きにすっかり引き込まれた子ども達に笑顔が広がりました。つづいて、出前が行われた日が「虫歯の日」ということで、虫歯退治ゲームをしました。カーテンをくぐった先にあるボールを的に当てて、みんなで虫歯を退治しました。最後はみんなで輪になってリズムに合わせて踊りました。出前が始まってすぐに子どもたちは楽しい手遊びの世界に引き込まれ、どんどん大きくなっていく子ども達の笑い声に合わせるように、お母さんたちの表情もリラックスして笑顔になっていきました。パネルシアターでは、出前担当者の豊かな動物の表現に合わせて子どもたちも楽しそうに身体を動かしていました。参加したお母さんは、家ではできない運動や手遊びを体験できて楽しかったと話していました。

◎富山市中央児童館　親子サークル

幼保連携型認定こども園石金こども園からは、富山市中央児童館の親子サークルで6月、7月の2回にわたり保育の出前をしました。出前メニューは、子ども達の年齢と季節を味わえる内容を考えていただきました。6月は、元気いっぱいの親子9組が集まり、初めに出席確認が行われ、子どもたちが大きな声で返事をしていました。出前は、手遊びをしてお母さんとたくさんふれ合った後、親子で楽しめる体操をしました。つづいてカエルの歌を歌っていると、「ゲロゲロ」と音がするカエルの登場です。これからみんなでこのカエルを作ろう!カエルの工作の材料は、紙コップとストローを使います。子どもたちは、お母さんと一緒に思い思いにカエルの顔を書いて、材料を張り付けるとできあがり。さっそくカエルの音を鳴らして楽しみ、中には自分で作ったカエルを嬉しそうに持ち歩く子もいました。

7月は、親子12組が集まり、七夕飾りの工作をしました。作った飾りと笹を持って、七夕の飾りつけをしたAMAIZING TOYAMAの前で撮影会を行いました。工作は、参加者の皆さんがとても真剣な表情で飾りに絵を描きました。撮影会では、自分たちが作った飾りと、用意した星や織姫彦星の飾りを選んで撮りました。最後は絵本「きんぎょが　にげた」を読んで、子どもたちは絵本の中で逃げた金魚を見つけました。児童館に集まってきた子どもたちを笑顔で迎え、工作の時間には、子どもたちの一人ひとりの良いところを褒めながら、お母さんに積極的に話しかける出前担当者とお母さん同士が子育てについて話し合う姿がとても印象的でした。

子育て支援事業
保育の出前

子育ての楽しさを出前しま～す♪

子育ては楽しく喜びと感動いっぱいのいとなみです!

子育て支援事業「保育の出前」とは？

保育士等が子育て支援事業の一環として地域や家庭に出向き、専門知識・技術を活かした遊びの実演を行い、子どもとの関わり方や子育ての楽しさ・喜びを伝えるボランティア活動（無償）です。

具体的な保育の実演内容とは？

保育士等2～3人で行う20分程度の実演で、内容は次のとおりです。

❶家庭にある材料を使って手作り遊具を作り、家庭で子どもと一緒に楽しめる遊びの紹介

❷運動遊び、手遊びなどを通して、サークルや家庭で笑いや会話が広がるような遊びの紹介

❸子どものしぐさ、遊びを通して発達のポイントや、子どもが求めている関わり方など、子ども理解につながる例の紹介

地域の子育てを応援します!

出前先は・・・

公民館、学校、児童館、企業など

くろべっ子つうしん

くろべっ子つうしん168話

「サヨナラマタネ」

くろべっ子つうしん283話

「おじいちゃん、おばあちゃんありがとう!」

「子どもたちから力をもらったよ」と笑顔を見せて下さった、おじいちゃん、おばあちゃんたちの温かい思いが伝わってきました。

「くろべっ子つうしん」は、黒部市子育て応援サイト
すこやかくろべっ子で見ることができます。

編集後記

今回のフォーラムは、「地域協働わくわく子育て支援フォーラム」から「子どもの育ちを支える子育て支援フォーラム」に変わりましたが、子育て支援は、地域との関わりがとても大切なことに変わりません。

フォーラムでは、奥山千鶴子氏の記念講演、保育の出前、民生委員・児童委員活動の取り組みが紹介されました。

県内では様々な子育て支援の活動があります。見過ごしたりしていませんか。ぜひ参加利用してください。子育ての参考、またリフレッシュできるかもしれません。参加することが大事です。

「くろべっ子つうしん」4コマ漫画でとても読みやすく、分かりやすく子育てが楽しくなります。

フォーラムに参加いただいた皆様、出演していただいた皆様、たくさんの方のご協力をいただき感謝いたします。ありがとうございました。

立野保育所　金山

「会長のひとこと」

2020年は東京オリンピックという大切な年にもかかわらず、1月より新型コロナウイルスが世界中で流行し、日本でも2月27日に小中高等学校の休学が要請され、休校となった。

「ここ1～2週間が流行を左右する」大事な時期として、先んじて取り決められたものであった。「外出の自粛」が要請され、政治・経済・文化・スポーツ等のあらゆる分野で多くの人が集まる集会・懇親会等が中止もしくは延期となり、その影響は計り知れない。「無観客大相撲」「選抜甲子園中止」は後世にのこる事件となることだろう。

保育園・こども園は通常通り「営業」とはいえ、卒園・入園の大事な時期に事業の縮小を余儀なくされている。保育園で大流行しないことを願うばかりである。困難な時期とはいえ、「子どもの権利」が守り抜かれることはどんな時でも社会の責任であることを肝に銘じたいものである。

富山県保育連絡協議会　会長　小島　伸也

連絡先

「保育の出前」についてのお問合せは、
お近くの保育所(園)・認定こども園または、
県保育連絡協議会(076-431-6727)へ。

発　行：富山県保育連絡協議会
〒930-0094 富山市安住町5番21号サンシップとやま内
TEL 076-431-6727 FAX 076-432-6064
発行日：令和2年3月